愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第49巻　第2号　49～55　2003

大学生の対人関係認知およびストレス反応と学校享受感の関連

松　尾　美　耶
（学　　生）
佐　藤　公　代
（教育心理学教室）

（平成14年10月17日受理）

The relationship between cognitions of interpersonal relations and the enjoyment of attending school

Miya MATSUO and Kimiyo SATOU

（問題と目的）

小，中学校における心の健康に関する問題は近年とみに増加の傾向をたどっている。文部省（1999）によると平成10年度に「不登校」を理由として年間30日以上学校を欠席した児童・生徒数は12万人を超えた。大学においてもスチューデント・アパシー，対人恐怖という適応障害を抱えるものが少なからずおり，大学生の健康保持増進をはかることを目的とする保健管理センターに対して「精神的心理的な側面の健康管理がより強く要請」されている。（西平，1983）

小，中学校現場においては，児童・生徒を取り巻くストレスを心身疾患の原因を考える際の要因として取り上げた研究がいくつかなされている。

中学校においては，“教師との関係”“友人関係”“部活動”“学業”“規則”“委員活動”の6つの要因が主要な学校ストレッサーとして挙げられている。（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992）

その中でも，小・中学生の友人関係認知と教師関係認知は学校享受感に影響を及ぼしていた。（山本・仲田・小林，2000）

そこで本研究では，大学生の学校生活におけるストレスとして特に友人関係認知と教師関係認知を取り上げ，大学生の友人関係認知，教師関係認知，及びストレス反応と学校享受感の関連について検討する。

(方　　法)

1．対　　象

国立E大学の学生180名を対象として実施し，記入漏れや記入ミスのあったものを除き，有効回答者174名（男子33名，女子141名）を分析対象とした。

2．調査方法

以下の3種類から構成される質問紙調査票を用いた。2001年1月に一斉法により，無記名方式で施行した。

1）友人関係認知尺度・教師関係認知尺度（Appendix 1，2参照）

菊地ら（1990）が作成した「対人関係認知尺度」を，大学生用に「担任教師」を「普段大学生活で最もよく接する大学の教官1人」と改めて使用した。友人・教師に対する関係の認知について，4つの側面から捉えようとするものである（友人関係認知尺度4項目，教師関係認知尺度4項目）。それぞれの項目について5件法で回答を求め，「関係が良好である」と認知しているほど得点が高くなるように得点化を行った。なお，「友人」とは“普段よく話す友達2～3人”を想定して答えてもらった。また，「教師」については，普段大学生活で最もよく接する大学の教官1人を想定して答えてもらった。

2）学校享受感尺度（Appendix 3参照）

古市（1994）が作成した「学校享受感尺度（11項目）」を使用した。これは，先に古市（1991）が作成した「学校ぎらい尺度」の反転項目版であり，α係数が.90と高く（筆者の場合はα=.87），適応傾向との基準関連妥当性の検討が行われている。「よくあてはまる」～「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求め，学校を楽しいと感じているほど得点が高くなるように得点化した。

3）ストレス反応尺度（Table 1参照）

岡安ら（1992）によって開発され，さらに三浦ら（1995）によって改編された「中学生用ストレス反応尺度」を使用した。この尺度は「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の4つの下位尺度から構成されており，合計24項目からなる。また，信頼性・妥当性に関しては，いずれも高い水準にあることが示されている。「よくあてはまる」～「まったくあてはまらない」の4件法で回答を求め，ストレス反応が高いほど得点も高くなるように得点化を行った。

(結果と考察)

1．ストレス反応尺度の因子分析結果について

調査で使用した「中学生用ストレス反応尺度」について因子分析（主因子解→バリマックス回転）を行った結果，4因子が抽出された。その後，どの因子に対する負荷量も低い（負荷量が.50以下）項目〈2．体がだるい〉〈8．心が暗い〉を削除し，再度同様の方法で因子分析を行った。その結果，三浦ら（1995）とほぼ同様の因子構造が認められたので，三浦ら（1995）の研究と同様に，それぞれ「身体的反応」因子，「抑うつ・不安」因子，「不機嫌・怒り」因

Table 1　ストレス反応項目の因子分析結果

質問項目	抽出因子 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ．身体的反応（α=.89）				
1．頭痛がする	.71	.14	.18	.11
9．頭が重い	.70	.19	.31	.31
20．体が熱っぽい	.70	.21	.38	.18
15．頭がくらくらする	.68	.12	.27	.29
Ⅱ．抑うつ・不安（α=.88）				
22．さみしい気持ちだ	.25	.72	.26	.17
21．不安を感じる	−0.0	.66	.07	.29
16．みじめな気持ちだ	.49	.62	.30	.10
7．何事にも自信がない	.13	.57	.14	.39
10．悲しい	.51	.51	.39	.17
6．泣きたい気分だ	.37	.50	.47	.07
Ⅲ．不機嫌・怒り（α=.91）				
5．いらいらする	.09	.12	.72	.16
3．気分がむしゃくしゃしている	.26	.27	.71	.15
13．腹立たしい気分だ	.46	.17	.69	.19
18．怒りを感じる	.43	.18	.67	.14
19．不愉快な気分だ	.36	.32	.64	.19
11．だれかに，怒りをぶつけたい	.48	.11	.60	.18
Ⅳ．無気力（α=.85）				
14．根気がない	.19	.10	.03	.75
23．ひとつのことに集中することができない	.24	.27	.17	.75
24．勉強が手につかない	.04	.20	.16	.73
12．むずかしいことを考えることができない	.24	.08	.07	.52
17．体から力が湧いてこない	.22	.44	.32	.51
4．頭の回転が鈍く，考えがまとまらない	.03	.16	.33	.50
因子負荷量2乗和	3.88	3.05	4.04	3.23
寄与率（%）	16.85	13.27	17.54	14.03
累積寄与率（%）	34.40	61.70	17.54	48.43

子，「無気力」因子と命名した。α係数は.85～.91の間に収まり，項目数は最終的に22項目となった。(Table 1 参照) なお，本研究ではより精度を高めるために調査項目2，8を削除しているが，そのことによって因子の意味に質的差異が生じるとは考えられない。

2．性差・年齢差・学部差について

尺度ごとに性・年齢および学部を要因とした分散分析を行った。その際，友人関係認知尺度および教師関係認知尺度については4項目の合計得点を算出，ストレス反応についてはそれぞれ下位尺度（「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」）に含まれる項目の合計得点を算出，学校享受感については10項目の合計得点を算出し，分析を行った。

性，年齢および学部を要因とした分散分析を行った結果，性差が教師関係認知（$F(1/173)=4.9$, $p<.05$）にみられた。女子の平均値が男子より有意に高く，女子大学生は男子大学生よりも教師との関係を良好だと判断していることが明らかになった。これは岡安ら（1992）の研究において中学生に，山本ら（2000）において小学生にそれぞれみられる傾向である。女子大学生は小・中学校の経験から教師とのラポールを構築しやすいのではないかと思う。

年齢差は，学校享受感（$F(2/173)=3.5$, $p<.05$）に有意差がみられた。多重比較の結

果，20歳以上の大学生の平均値が19歳の大学生よりも低く，20歳以上の大学生は19歳の大学生よりも学校を楽しいと感じていないことが明らかになった。また，性と年齢の交互作用効果が学校享受感（$F(2/173)=3.3$, $p<.05$）において有意であった。単純効果の検定の結果，女性ケースにおける年齢差及び，年齢20歳以上ケースにおける性差が有意であった。女性ケースでは，学校享受感（$F(2/140)=6.5$, $p<.01$）において20歳以上の大学生の平均値が18歳および19歳の大学生の平均値よりも低かった。年齢20歳以上ケースでは，学校享受感（$F(1/31)=4.8$, $p<.05$）において女性の平均値が男性よりも低かった。つまり，特に20歳以上の女子大学生は，20歳以上の男子大学生および，18歳，19歳の女子大学生よりも学校を楽しいと感じていないことが明らかになった。青年期にアイデンティティを確立していく際，いくつかの自己同一性を確立していく。そのひとつが職業同一性である。成人を迎えて誰もが向き合うであろうこの課題は，不景気に伴う就職難によってより克服困難になっていると思う。特に女性にとっては性役割の問題が絡んでくるため，いっそう克服しがたい課題となってのしかかっているのではないだろうか。

学部差は，教師関係認知（$F(2/172)=9.2$, $p<.01$）にみられた。教育学部の平均値が法文学部および医学部よりも有意に高く，教育学部の学生は，法文学部および医学部の学生よりも教師との関係を良好だと判断していることが明らかになった。教育学部は基本的に教員を育成するための学部であるので，他の学部に比べて学生が，教師に対して親和性を感じやすいのではないかと考えられる。そのため，教師とうまくやっていけるのではないだろうか。

3．友人関係認知，教師関係認知およびストレス反応と学校享受感との相関について

友人関係認知尺度，教師関係認知尺度およびストレス反応尺度の4因子と学校享受感の相関を算出した。(Table 2 参照) 友人関係認知と学校享受感に5％水準で正の相関がみられた。ストレス反応の「身体的反応」「抑うつ・不安」「無気力」と学校享受感に1％水準で，「不機嫌・怒り」と学校享受感に0.1％水準でそれぞれ負の相関がみられた。教師関係認知尺度と学校享受感の相関は有意でなかった。

Table 2　友人関係認知，教師関係認知およびストレス反応と学校享受感との相関

	友人関係認知	教師関係認知	身体的反応	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無 気 力
学校享受感	.137*	.049	−.204**	−.203**	−.292***	−.220**

*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

さらに，友人関係認知尺度，教師関係認知尺度およびストレス反応尺度の4因子を独立変数とし，学校享受感を従属変数として重回帰分析，ステップワイズ法を行った結果，「不機嫌・怒り」因子のみが学校享受感と関数の関係にある独立変数として残った。(Table 3 参照) つまり，ここでは学校享受感に影響を与えている独立変数は「不機嫌・怒り」であることが明らかになった。したがって，学校が楽しいという感じは「不機嫌・怒り」に反比例する形で規定されている。大学生は自分の身体

Table 3　友人関係認知，教師関係認知およびストレス反応と学校享受感の重回帰分析結果

説明変数	基準変数	学校享受感(β)
不機嫌・怒り		−.29***
F		15.90***
adj. R^2		.085

*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

的あるいは情動的・行動的なストレスを分化して認識することができるため，多様なストレス反応が学校享受感の形成にマイナス要因として働くことがないのではないかと思われる。したがって，逆に心の健康に関する問題の予防が難しく，問題が顕在化した時にはひどく心を病んでいる可能性があると考えられる。そのため，問題が顕在化していないものに対する啓蒙活動などの援助を保健管理センターなどで強化する必要があるといえよう。

(今後の課題)

学校ストレス過程を明らかにするために20歳以上の女性を対象にする。その際，ストレス反応を規定する要因としてのストレッサーだけでなく，個人の特性やコーピング（Lazarus & Folkman, 1984），およびソーシャルサポート（Cohen & Wills, 1985）といった媒介変数を考慮にいれる必要がある。また，学部差についても検討していくことを今後の課題とする。

(引用文献)

Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310−357.

古市祐一　1991　小・中学生の学校嫌いの感情とその規定要因　カウンセリング研究，**24**，123−127.

古市祐一　1994　学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録，**96**，105−113.

菊地陽子・生月　誠・山口正二・原野広太郎　1990　対人関係認知と対人イメージとの関係についての研究，**23**，71−78.

Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 Stress, *appraisal, and coping*. New York: Springer.

三浦正江・福田美奈子・坂野雄二　1995　中学生の学校ストレッサーとストレス反応の継時的変化　日本教育心理学会第37回総会発表論文集，555.

文部省　1999　我が国の文教施策（平成11年度）　大蔵省印刷局

西平直喜　1988　大学保健管理センター　関　峋一・返田　健（編）　大学生の心理　自立とモラトリアムの間にゆれる　有斐閣選書　92.

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二　1992　中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関連　心理学研究，**63**，310−318.

山本淳子・仲田洋子・小林正幸　2000　子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連−学校不適応予防の視点から−　カウンセリング研究，**33**，235−248.

Appendix 1　友人関係認知尺度

あなたが普段よく話す友達２～３人を思い出して答えてください。以下の４つの質問の答えとして最も当てはまる番号を○で囲んでください。

１．あなたは，あなたの友達と気軽に楽しく活動できていますか。
「私は，友達と」
1．大変上手くいっている。
2．どちらかというと上手くいっている。
3．ふつう。
4．あまり上手くいっていない。
5．上手くいっていない。

２．あなたに対する友達の態度を，どのように感じますか。
「私に対する友達の態度は,」
1．とてもよい。
2．どちらかというとよい。
3．ふつう。
4．あまりよくない。
5．よくない。

３．あなたは，友達をどう思っていますか。
「私は，友達を」
1．とても好きだ。
2．どちらかというと好きだ。
3．ふつう。
4．あまり好きでない。
5．好きでない。

４．あなたは，友達があなたのことをどう思っていると感じますか。
「友達は，私を」
1．とても好きだと思っている。
2．どちらかとういと，好きだと思っている。
3．ふつう。
4．どちらかというと，好きではないと思っている。
5．好きでないと思っている。

Appendix 2　教師関係認知尺度

あなたが普段よく接する大学の教官1人を思い出して答えてください。以下の4つの質問の答えとして最も当てはまる番号を○で囲んでください。

1．あなたは，あなたの教官と気軽に楽しく活動したり話したりできていますか。
「私は，教官と」
1．大変上手くいっている。
2．どちらかというと上手くいっている。
3．ふつう。
4．あまり上手くいっていない。
5．上手くいっていない。

2．あなたに対する教官の態度を，どのように感じますか。
「私に対する教官の態度は，」
1．とてもよい。
2．どちらかというとよい。
3．ふつう。
4．あまりよくない。
5．よくない。

3．あなたは，教官をどう思っていますか。
「私は，教官を」
1．とても好きだ。
2．どちらかというと好きだ。
3．ふつう。
4．あまり好きでない。
5．好きでない。

4．あなたは，教官があなたのことをどう思っていると感じますか。
「教官は，私を」
1．とても好きだと思っている。
2．どちらかとういと，好きだと思っている。
3．ふつう。
4．どちらかというと，好きではないと思っている。
5．好きでないと思っている。

Appendix 3　学校享受感尺度

1．私は学校へ行くのが楽しみだ。
2．学校は楽しくて，一日があっという間にすぎてしまう。
3．学校は楽しいので，少しくらい体の調子が悪くても学校に行きたい。
4．学校では，楽しいことがたくさんある。
5．学校にいるのがいやなので，授業が終わったらすぐ家に帰りたい。
6．学校がなければ毎日はつまらないと思う。
7．日曜日の夜，また明日から学校かと思うと気が重くなる。
8．今の学校は楽しいので，いつまでもこの学校にいれたらよいのにと思う。
9．学校では，いやなことばかりある。
10．私はこの学校が好きだ。